

発達に困難のある視覚障害の子どもとの 音楽活動場面における相互性の促進に関する事例による研究

市川万里江

I 問題

1 障害のある子どものコミュニケーション

子どもにとって、コミュニケーションとは自己を形成し発達を展開していく場であり(岡本, 1982), 人はどのような重い障害を有していても, 相互交渉を通して自己を変えていく存在である(柴田, 1985)。しかし, 障害の重い子どもはその置かれた状況の困難さのために他者に対して受動的・依存的にならざるを得ず, 周囲の人とともに取り組む活動(共有する活動)が持ちにくく, 周囲とつながることが乏しくなる(土谷, 2006)。

このような子どもたちとかかわり手との相互的コミュニケーションは, 「重ね合い/響き合い」のやりとりから「掛け合い」や「能動・受動の交代」, 「対話」へとつながり, この時子どもとかかわり手の双方には活動を共有する一体感や喜びによる情動の共有が生まれる(土谷, 2006)。

2 障害のある子どもに対する音楽活動

音楽は障害の重い子どもにとって受け入れやすく, 非言語のコミュニケーション手段としても使用できる(松井, 2003, 1980)。障害児に対する音楽療法の目標として, コミュニケーション能力の改善, 表現力の拡大(土野, 2005)等が考えられる。さらに, 楽器は子どもたちの表現を助け, 豊かな自己表現や楽器を媒介としたコミュニケーションの体験を可能とする(遠山, 2005)。

これまでの研究(田中・針谷, 1996; 正木・鳥越, 2003; 野上, 2000 他)から, 障害を有する子どもの相互性の促進には, 音・音楽を用いたアプローチが有効な手段の一つと言える。その際, ノードフ・ロビンズが3つの視点から評価尺度を定めた

ように(Bruscia, 1999), 音楽活動を複数の視点から分析, 検討することには意味があると考えられる。

II 目的

本研究では, 発達に困難のある視覚障害の子どもとかかわり手との音楽活動場面における相互性の促進について, 以下の2点から検討する。

- 1 音楽活動の相互性が高次化される条件について検討する。
- 2 音楽活動に伴う対人的相互性の様相について検討する。

III 方法

1 対象児

発達に困難のある視覚障害(全盲)を有する7歳2か月の女兒Mを対象とする。Mはリズムやテンポ等に対して繊細な反応を示し, これらの変化による演奏を好む。活動の楽しみ方は受動的で, 自発的な表現は少なく, かかわり手のイニシアチブによって活動を進めることが主である。

その障害ゆえに活動の見通しを持ちにくいMは, 構造的な音楽によって安心を得て, 演奏している間は自らの音楽世界へ浸り込む様子が見られる。一方で, かかわり手へ向かう意識は狭まり, やりとりの促進に困難が見られる。

2 手続き

平成19年2月から10月まで, 約30分間の音楽活動を計19回実施した。活動は, Mが主にたいこ, かかわり手I(筆者)及びかかわり手T(学生)がキーボードやたいこの演奏と歌唱, さらに参加学生が歌唱をして進めた。楽曲はMが親しめるものを選び, わかりやすく楽しめるよう適宜編曲して用

いた。また、遠山(2005)の「子どもに合わせる技術」を参考として、かかわりの方針とした。

音楽活動は、矢野(1991)を参考にパーテンの「社会的遊びの発達の分類」及び、土谷(2006)の「子どものイニシアチブとコミュニケーションにおける共同性・相互性」を参考にして状況を設定し、活動はMとかかわり手と一緒に演奏することを前提に行った。

1) 目的1「音楽活動の相互性の高次化」設定条件

(1) 活動Ⅰ「模倣」的活動

「ドレミの歌」(作曲 リチャード・ロジャース)を用い、Mがかかわり手Ⅰの変化させるテンポを模倣して演奏する。

(2) 活動Ⅱ「役割(パート)分担」的活動1

「おもちゃのチャチャチャ」(作曲 越部信義)を用い、Mとかかわり手Ⅰ及びかかわり手ⅡTが決められた役割(パート)を分担して演奏する。

(3) 活動Ⅲ「役割(パート)分担」的活動2

「すいかの名産地」(アメリカ民謡)を用い、Mとかかわり手Ⅰが決められた役割(パート)を分担して演奏し、さらに役割(パート)を入れ替わって演奏する。

(4) 活動Ⅳ「交代」的活動1「掛け合い」的活動

「やまびこごっこ」(作曲 若月明人)、「大きな歌」(作曲 中島光一)を用い、Mとかかわり手Ⅰとが能動・受動の掛け合いをして演奏する。

(5) 活動Ⅴ「交代」的活動2「役割(パート)交代」的活動

「やまびこごっこ」(作曲 若月明人)を用い、Mとかかわり手Ⅰとが能動と受動の掛け合いをし、さらにM自身がリズムを変化させて演奏する。

2) 目的2「音楽活動に伴う対人的相互性の様相」設定条件

(1) 目的1にて行った全試行の前後に、Mとかかわり手Ⅰ及びかかわり手ⅡTが言葉でのやりとりを行う。

(2) 活動Ⅰから活動Ⅴの期間において同一楽曲

「南の島のハメハメハ大王」(作曲 森田公一)を演奏し、その前後にMとかかわり手Ⅰ及びかかわり手ⅡTが言葉でのやりとりを行う。

3 分析

目的1については、活動Ⅰ「テンポ一致率」、活動Ⅱ「たたき分け実行率」、活動Ⅲ「分担達成率」、活動Ⅳ・活動Ⅴ「掛け合い達成率」を設定し、計155試行についてMの演奏状態を示した。

目的2については、全試行の前後5秒間のMとかかわり手との言葉でのやりとり場面におけるMの情動表出(笑顔・笑声・身体の動き)と、Mのかかわり手へ向けた表出(かかわり手へ顔を向ける・かかわり手へ身体を寄せる)の表出頻度を活動ごとに算出した。

Ⅳ 結果及び考察

1 目的1「音楽活動が高次化される条件」について

活動が段階を追って進むにつれて、Mは一人だけで音楽を楽しむ段階を越え、音楽の演奏において共演者と相互に作用し合って演奏することが可能となった。そして、活動Ⅴでの「役割(パート)交代」的活動において、それまで活動に対して受動的だったM自身からリズムを変化させて演奏するという能動性を持って活動することが可能となった(図1)。相互的なコミュニケーションのステージに沿って、音楽の構造を生かした活動を段階的に展開することで、Mは徐々にかかわり手の存在に気付き、演奏中にMとかかわり手とがお互いに作用し合いながら演奏するに至る、つまり音楽活動の相互性が高次化していくことが示された。

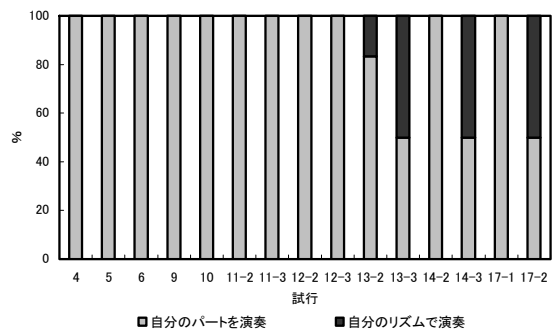


図1 活動Ⅴ 掛け合い達成率(Mが先行するパートの場合)

2 目的2「音楽活動に伴う対人的相互性の様相」について

活動Ⅰ「模倣」的活動の段階では、Mのかかわり手へ向けた表出は少なかったが、かかわり手と作用し合いながら演奏する活動の段階が進むにつれて、Mのかかわり手へ向けた表出は徐々に増加する傾向が見られた(図2)。

一方、情動表出については活動Ⅰでポイントが高いものの、その後は低い値となる(図3)。これは、Mにとって音楽の活動内容が楽しさだけではなく真剣さも要求されるものへと変化したためと考えられる。情動表出が減少していても、かかわり手へ向けた表出が音楽活動の進展と共に増加していることから、Mの音楽活動に伴う対人的相互性が促進されたと考えられる。

以上から、子どもとかかわり手との音楽活動場面における相互性の促進には、音楽活動を段階的に展開し、非言語的コミュニケーションを重ねる活動を行うことが有効であると考えられる。

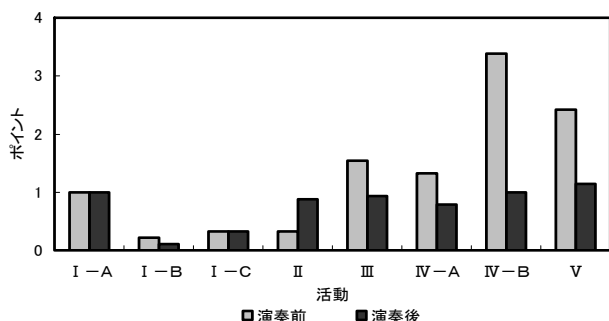


図2 活動A 演奏前後のMのかかわり手へ向けた表出

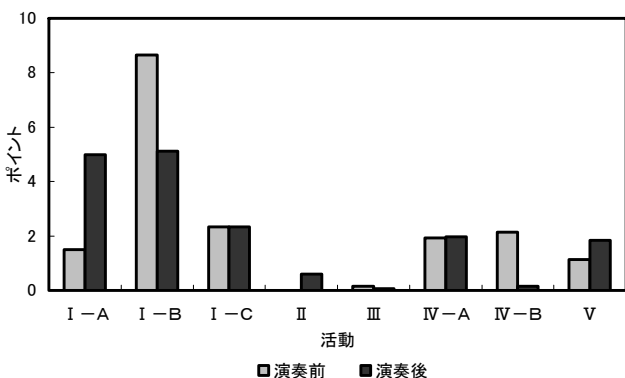


図3 活動A 演奏前後のMの情動表出

V 引用文献

- Kenneth E. Brucsia(1999)創造的音楽療法 ノードフ /ロビンス モデル. 林庸二(監訳)即興音楽療法の諸理論(上). 人間と歴史社. Pp. 45-54.
- 田中美郷・針谷しげ子(1996)盲・重度脳障害児における音楽的コミュニケーションの発達の長期観察. 音声言語医学, 37, 420-428.
- 正木由希・鳥越隆士(2003)発達障害児に対する音・音楽を通したコミュニケーション支援の試み. 発達心理臨床研究, 9, 107-116.
- 松井紀和(1980)音楽療法の手引—音楽療法家のための—. 牧野出版.
- 松井紀和(2003)音楽療法 総説. 日野原重明(監修)篠田知璋・加藤美知子(編集)標準音楽療法入門(上)理論編 改訂版. 春秋社. Pp. 3-17.
- 野上智寿子(2000)発達障害を伴った視覚障害児のコミュニケーションを育てる—考察—音楽療法的アプローチを通して—. 発達臨床研究, 18, 47-55.
- 岡本夏木(1982)子どもとことば. 岩波新書.
- 柴田保之(1985)重度・重複障害児の教育に関する基礎的考察—人間行動の成りたちの基礎に立ち返って—. 東京大学教育学部紀要, 25, 236-245.
- 田中美郷・針谷しげ子(1996)盲・重度脳障害児における音楽的コミュニケーションの発達の長期観察. 音声言語医学, 37, 420-428.
- 遠山文吉 編著(2005)知的障害のある子どもへの音楽療法—子どもを生き生きさせる音楽の力—. 明治図書.
- 土野研治(2005)学校教育における音楽療法. 日野原重明(監修)篠田知璋・加藤美知子(編集)標準音楽療法入門(下)実践編 改訂版. 春秋社. Pp. 92-112.
- 土谷良巳(2006)重症心身障害児・者とのコミュニケーション. 発達障害研究, 28, 238-247.
- 矢野善夫・落合正行 共著(1991)発達心理学への招待. 新心理学ライブラリ 5. 梅本堯夫・大山正 監修. サイエンス社.